

「神の霊」「初めに言葉あり」を密かに言い換えて、宇宙から霊を追放する者たち

Greatchain

February 15, 2024

先日書いた「一つの聖書と宗教から、今世界のあらゆる霊的問題に火がついた」は、文字通りのことが起こり、神の存在の証明（と反証）をめぐる、唯物科学、数学理論、悪魔論、カトリック、イスラム、伝統的神学、新しい神学など、などこれまであまり論じられたことのない議論や疑惑が、ユーチューブを通じて沸き起こっている。ただその発端となった JW を論ずる記事については、このところ見つかり次第、削除されているらしく、その狼狽ぶりがうかがえる。本質的に何が起きているのか？

前稿に続いて、私自身の観点から、確実に証明可能な議論を進めることにする。「新聖書」（新世界訳と呼ばれる）は普通の聖書に対し、彼らに都合の良い書き換えを随所に行っている。いったいなぜそんなことをするのか？ そのために言葉の辻褄が合わなくなることがあるが、それを気づかせないように、素通りさせようとする狡猾な企みの例を、また一つ示そう：——「マタイ：10・28」に、「また体を殺しても魂を殺すことのできない者を恐れるな。むしろ体も魂も地獄で滅ぼす力のある方を恐れなさい」という記述がある。これは、人間は身体と魂でできていると信ずる者の言い方である。これに対し、新聖書は、人間には魂も霊もないと言わねばならないので、その箇所は、「そして体は殺せても命は奪えない人たちを恐れてはなりません。命も体もゲヘナで滅ぼせる方を畏れなさい」と改ざんしている。これでは意味が通じない。「体は半殺しにしても命までは奪えない」、あるいは「体は奪っても命までは奪わない」（強姦）であればわかる。しかしなぜそこまで執拗なのか？

数年前、数日に及ぶ訪問を受けて、ある信者の方と長く話し合ったことがある。彼はそのとき、聖書という本は全巻にわたって、死後の魂も霊もないということを証明するための本なのだと教えてくれた。しかしそうではなかった。それはそのように念入りに改ざんしたからだった。（ついでに言えば、そのとき、公開の討論をさせてくれないかと言ったら、それは厳しく禁じられていると言われた。）これは何者か強力な指導者による、強圧的な指導と考えざるを得ない。そしてこれこそ、典型的な「換骨奪胎」であり、改良した聖書と見せかけて、ごっそり骨を抜き取ることが行なわれている。これほど巧妙で手の込んだ、大掛かりな計画によって、しかも神聖とされる聖書を使って、この宇宙から、人間の靈魂

だけでなく神の霊まで追い出すことを企んでいる。よほどのことと考えねばならない。それは神を畏にかけることに相当するだろう。

繰り返すと、彼らは In the beginning was the Word の終わりを、a word と書き替えた。これによって絶対的な神の言葉が、誰でもよい普通の人の言葉になる。これは、**宇宙という神の住処から、密かに神を追い出すための用意周到な計略**と考えねばならない。しかも「新聖書」は、「初めに言葉があった」に対し、「**初めに言葉と呼ばれる方がいた**」という、奇妙奇天烈な訳を考えた。

彼らはウソを暴かれ、権威を失って失墜したのだからいいではないか、という人もいるかもしれないが、それは間違っている。彼らは 100 年以上もかけて、全世界にこの教団を増やし、(私の誤解でなければ)世界の終わりの審判の日を、次々に先延ばししていったのだから、思い付きで大芝居を打ったわけではない。だから彼らがいなくなったはずはない。むしろこれからが、いよいよ彼らと我々の対決の日となるだろう。第三次大戦と危険が始まるとともに、彼らは自らの好機到来と考えているかもしれない。そして「神殺しなら大いに援助しましょう」と言う者たちは、この恐ろしい世界にいくらでもいる。それがどういうことか、考えてみようと思う。

彼らの世界解釈の誤解(意図的誤解)の根本にあるのは、霊としての神より、名前も顔形も実体もある神の方が、真実に近いということのようだ。これは彼らの「創世記：1・1」や「ヨハネ：1・1」の解釈を見ればわかる。しかし実際はその逆である。この宇宙の根源を尋ねるとき、我々は普通、見えない存在を上位に置く。

「どの神様が一番偉いか？」などという子供の間答のようだが、これは重要である。アリストテレスはこの世界の生成(あえて創造とは言わないことにする)を説明するのに、「4つの原因」を考えた。まず我々が物理的に考えるモノや物力がある。これを彼はそれぞれ「質料因」「作用因」と呼んだ。しかし、宇宙の生成の根源において働く「原因」は、それだけではない。造られる物の形成に働く意志や意図、また、そのまだ実現していない目的がなければならない。これを彼は「形相因」「目的因」と呼んだ。近代物理学は、形相因も目的因も要らない、物質と物力だけで十分(生命も説明できる)とした。しかし、物質から生命を造ことは近年、ついに絶望的となった。我々が生きている現実の世界は、目に見えない**心の側面**を取り込まねばならないことに、科学者は気づき出した。そして心という側面が、モノの側面より上位にある(あるいは先にある)。

少し術学的に聞こえるかもしれないが、重要なポイントなのでお聞き願いたい。我々は「眼」という器官の生成を考えるのに、Seeing precedes the eye(見ることに目が先行する)という公式によらなければならない。この順序を逆にするには絶体できない。目玉の初期

の感光細胞のようなものを考えても、それは説明できない「眼があるから見える」という。しかし、見ようとする意思も意欲もないところに、どうして脊椎動物がみな持っている、あの眼が生まれるか？

これを聖書的に言い換えるなら「初めに見る（という心の働き）があった」と言わねばならない。「初めに言葉（ロゴス）があった」というのは、「宇宙創造の初めに、目に見えない心の働きがあった」ということである。これを神の意思に逆らって書き替えることはできない。創世記冒頭の「神の霊が水の表をうごめいていた」も、勝手に動かすことができない。（ただしここは、「水の表を覆っていた」より、moving に忠実に「うごめいていた」と訳すべきだろう。）

これが宇宙の意志を取り入れた**科学的**な解釈である。Intelligent Design という新しい科学改革運動は、神のインテリジェンスもデザインも、意図・意志も計画も目的も、「神を指す方向性」として証明できると主張する。すなわち、これを言い換えると、**初めにインテリジェンスがあった、デザインがあった、初めに意図・意志があった、計画があった、目的があった**、ということになる。神の存在の事実を、通常の科学的方法で彼らは証明している。ただそれは、いわゆる「神の存在証明」でなく、神の存在を「指し示す point to」というのが、彼らの特徴である。

このインテリジェント・デザインを**最も恐れている者はだれか**？ それは現在、神と戦おうとしている者たち全体である。そしてそれは先ほども言ったように、この世界に深く隠れ、また彼らに寄生するメディアとして、いくらでも存在する。しかしこの者たちは、我々一般大衆が（ダーウィンと明瞭に決別して）ID を日常的に受け入れるようになったとき、音を立てて敗北せざるを得ない。そのときまでは、彼らは ID を「宗教」だと言って軽蔑しつづけ（ウィキペディアが現在、そういう態度を取っている）、あるいはもしかすると、**神霊のない聖書**が最も権威ある聖書だなどと、言い出すかもしれない。

我々は戦略的に行動しなければならない、ただ、あれよあれよと見ているだけでは、何も解決しない。

連日のユーチューブで人々の論争の中心になっているのは、神は存在するかしらないかである。これは今までになかったことである。わかりやすい例で言うと、有名なオックスフォードの、ジョン・レノックスが神の存在を断言し、同じオックスフォードのリチャード・ドーキンズが、意地になってそれを否定している。この2人が典型であろう。

参考文献：「NHK の思想的引き締め番組：ダーウィン進化論」：

<https://www.dcsociety.org/2012/info2012/180320.pdf>

